

新しい情報様式とウェストファリア・システムの変容  
アイデンティティ・ポリティクスの領域性と脱領域性について

土 佐 弘 之

## Summary

### The New Mode of Information and the Transformation of Westphalia System : The Relationship between Territoriality and De-territoriality.

Hiroyuki TOSA

The purpose of this paper is to critically examine the impact of new mode of information on the Westphalia System. When we talk about its transformation and the world society, realists' responses are very cool. They usually reject concepts such as cosmopolitanism or world citizenship by saying that these words are just rubbish. However if we are reminded that the nation is also social construct through language games, it becomes very clear that the symbolic order of Westphalia system could be transformed into another one through these games. In this sense, when we discuss about the transformation of Westphalia System, it is very important to examine a changing mode of communication where these words are circulated. On the other hand, we should be cautious about simple techno-optimism that lacks the perspective of the critical political economy.

In the first section, I examine the realist view about the impact of ICTs. Secondly I examine the techno-optimism, the so-called medium theory. Thirdly I take up the perspective of critical international political economy of information.

In the short term, the realist view seems to be plausible in some respects. However it ignores the long-term effect of ICTs on socially constructed identities and on global economy. While the 'closed territories' are substantially dissolved and Westphalia system cannot avoid being reorganized, de-territorial cosmopolitanism and territorial tribalism are now becoming influential forces in the field of identity politics. Although both seem to be contradictory at a glance, it should be noted that they are just each side of one coin : globalization.

In sum, two driving forces are now becoming stronger partly due to the impact of ICTs. Though de-territorial cosmopolitanism and territorial local tribalism tend to clash with each other, they sometimes complement each other. In the latter case, there is a good chance that a flexible alliance of multiple identities incites the crossing of borders and the connecting of inside and outside to break down the absurd border.

## ◆はじめに：ポストの時代と情報コミュニケーション技術

時代を特徴づける言葉として、ポストという接頭辞がつく言葉が、やたらと氾濫している(図①参照)。フォーディズムからポスト・フォーディズムへと移行する過程で、モダンからポスト・モダンの時代へと移行しているというジェイムソンやハーヴェイらの解釈は有名だ<sup>\*1</sup>(但し世界システムの中心部だけの話しだが)。さらにウェストファリア・システムの時代からポスト・ウェストファリア・システムの時代への移行という話もよくある<sup>\*2</sup>。また今は確かにポスト冷戦時代だ。かつてポスト工業化社会論などというものが流行したこともあった<sup>\*3</sup>。今やポスト資本主義などという言葉さえ流布している<sup>\*4</sup>。

このようにポストという言葉が氾濫しているという事実は、社会の大きな質的变化に誰もが感づいてはいるということを示している。しかし、ポストを接頭辞にもつ複数のキーワードを相互にどう結びつけて説明するかは難問である。本稿では、情報技術の変化そして資本主義の質的变化というものを説明変数にする見方を主として扱う。例えば、冷戦の終焉といったものも、そうした観点から以下のように解釈ができるだろう。

パクス・アメリカーナの時代は、ケインズ主義に立脚したフォーディスト国民経済の時代でもあった。しかし、ウオーラーステインらが指摘するように、1970年代以降、フォーディズムが成熟期を過ぎ、やがて衰退期に入った。つまり、世界システムは「コンドラチェフの波」のBフェーズを迎えたとされる。長い停滞期を迎えた覇権国アメリカは、レーガン政権成立と共にケインズ主義に決別を告げ、経済的なネオリベリズムへの転換を模索するが、一方で、冷戦パラノイアに駆り立てられ軍事ケインズ主義を維持し続け、袋小路に入ろうとしていた。ところが、新しい情報コミュニケーション技術(Information and Communication Technologies, 以下、ICTs)の登場に伴うポスト・フォーディズムへの世界システムの質的变化は、構造調整がより困難な国家社会主義経済を先に直撃し、結果として先にソ連を危機、崩壊へと追いやることになった。

このようにして終わった冷戦ではあるが、その冷戦の終焉そのものは、以下の点でユニークである。世界戦争の場合、戦勝国と敗戦国とが決定した後が続いて、世界秩序の再編成は起こるのが定番であったのに対して、冷戦は休戦協定も戦後処理もないまま、ずるずると「戦後」の過渡期に入っていた。冷戦期と冷戦後で何が変わったのか？実は、冷戦そのものが大きな変動を引き起こしたというより、冷戦終焉も、世界システムの大きな質的变化によって促されたのではないか。ここ十年ちかくグローバル化という言葉のハイパーインフレーションが続いているのは、そうした時代趨勢を反映したものであろう。グローバル化は、冷戦終焉によって加速化したことは確かであるが、それが冷戦を終わらした側面もあるだろうということである。

資本主義の性質について着目すれば、グローバル化とはフォーディスト国民経済の時代からポスト・フォーディスト・グローバル経済の時代への世界システムの質的転換を意味する<sup>\*5</sup>。

ポスト・フォーディズムという用語が曖昧で分析概念として耐えないという批判やグローバル化とポスト・フォーディズムとは互いに相容れないという指摘もあるが\*6、ポスト・フォーディズムやニュー・エコノミー等に喩えられる「資本主義の質的变化」は、情報化と連動しあいながら、進展していることは否定しようがないであろう。その過程で、冷戦は終わった訳だが、冷戦が終わったことで、その過程にますます拍車がかかることになった。そして、今、資本主義がそのように深化する過程で、ウェストファリア・システムもポスト・ウェストファリア・システムへと移行しているのであろうか。

本稿では、特にウェストファリア・システムの変容について、ICTsの変化つまり情報様式の変化という観点から批判的に検討していく。ウェストファリア・システムを越えるコスモポリタニズムといった議論を行った場合、「リアリスト」側からは「世界市民などというのは言葉の遊戯だ」といったような反応が必ずある\*7。しかし「国民といった集団的アイデンティティも、言説を通して遂行される社会的交渉の所産である」という構成主義の見方を念頭に置くならば\*8、言葉の遊戯つまり言語ゲームが重要であること、また言語ゲームを通じて意味秩序の組み替えが行われるリアリティを確認しておく必要があるだろう。また、その際、その言葉の遊戯が行われる回路と場所、つまりコミュニケーション様式（情報様式）との関係が重要であることは言うまでもない。本稿では、特にミディアム理論（medium theory）の再検討という形で\*9、その関係について考察を加える。

しかし、一方で、情報についての政治経済学的視点\*10を欠いた単純なテクノ・オプティミズムに対しても、注意が必要だ。本稿では、そうした論点を留意しつつ、「ウェストファリア・システムという集団的アイデンティティの一編成様式が、情報様式の変化と共に、どのように変わっていくのか」について、従来のミディアム理論と国際関係論（以下、IR）とのインターフェース領域を中心に、試論を展開していきたい。

中世	近代		ポスト・モダン
声	印刷	ラジオ テレビ	インターネット他 (ポスト工業化社会)
ウェストファリア・システム			ポスト・ウェストファリア システム?
フォーディズム			ポスト・フォーディズム
パクス・ブリタニカ  階級政治		パクス・アメリカーナ  冷戦  ポスト階級政治 (アイデンティティ・ポリティクス)	パクス・アメリカーナⅡ  ポスト冷戦

図① いくつもの「ポスト」

## ◆I テクノ・シニズム：静態的リアリズムと存在論的矛盾を抱えた主権国家

基本的にコミュニケーション技術の変化は、さほどウェストファリア・システムの大きな構造的変動を引き起こさない。つまり、ICTsの影響があっても、国際社会において主権国家が有力な主体である状況には変わりはない\*<sup>11</sup>。結局、ICTsは、政治的リーダーによって巧妙に利用されるだけである\*<sup>12</sup>。——といったようなリアリスト的見方もある。

軍事力そのものより、情報が、権力資源として、より重要になるという点は認めるが、それは、あくまで国家の戦略問題の性質が変化していることを言っているだけである。衛星写真等を含め情報は旧来から国家の重要な権力資源であった。そうした情報が以前よりも権力資源としてより重要になったとし、「＜核の傘＞と同様、またはそれ以上に＜情報の傘＞が、グローバル・ヘゲモニーの権力基盤として重要になってくる」といったナイ等の議論は、ある意味でリアリストの素直な反応だろう\*<sup>13</sup>。

この権力と情報の連関について、ランド研究所の研究者達は、以下のような見方を示している。

「——情報は、一般的には非物質的であると考えられてきたが、次第に物質の重要な部分を占めるようになってきた。それとは対照的に、権力は、長い間、物質的な資源に依拠すると長らく考えられてきたが、次第に非物質的なもの、形而上学的な性質をもっているものとされてきている。情報が物質的なものになるにつれ、権力はより非物質的なものになり、両者は相互に深く結びつき合うようになってきている。」\*<sup>14</sup>

これに加えて、彼らはICTsに対するリアリスト的見解を以下のように表明している。

「情報の時代は、確かに国家の性質を様々な形で変容させていくであろうし、非国家主体との協力がなければ、その行動領域は狭まっていくであろう。しかし、国家は、自決権そして主権の、有効な、また望ましい単位として残るであろう。——権力のソフト化と情報の有形化は、国家の新たな黄金時代の到来を知らせているというのが、我々の見解である。」\*<sup>15</sup>

彼らによれば、ICTsは、戦争様式に変化を与えるだけで、主権国家システムそのものには影響を与えないということになる。また、その戦争様式の変化については、次のように述べている。

「情報時代の戦争は、武器体系の性質の様々な変化、また標的の変更を意味している。その変化の一つは、殺傷能力をもった武器を使用して具体的な標的を壊すというやり方から、C<sup>3</sup>I（指揮統制情報通信）システムといったコミュニケーション・ネットワークを攻撃するというやり方への変化である。またネットワークへの攻撃も、武器から電子的技術へとシフトしてい

くであろう。」<sup>\*16</sup>

また、これと関連して、テロリスト、反体制運動、ネオファシズム、国際的犯罪組織等々、国家の支配に抵抗する諸勢力が、サイバー・スペースに潜入する危険性を彼らは声高に主張し、サイバー・スペースの管理、またそれと関連する暗号問題は、これからの安全保障政策の重要課題の一つとしている<sup>\*17</sup>。シンガポール、中国などの権威主義体制国家は、サイバー・スペースを実効的に支配しているという評価もあるが<sup>\*18</sup>、一国単位ではサイバー・スペースを統治することは不可能なため、一種の安全保障レジームないしグローバル・ガバナンスの下におき、なんとか統治可能な政治空間にしようという発想も出てくる<sup>\*19</sup>。

一方で、幾つかの国は、主導的産業セクターである情報産業の育成とその基盤整備に全力を傾けている。アメリカのNII (National Information Infrastructure) 政策、シンガポールのIT (Information Technology) 2000構想、マレーシアのMSC (Multimedia Super Corridor) 計画等は、その代表的な例であろう。こうした一連の情報産業政策の根底には、テクノ・ナショナリズム思考が流れているのは言うまでもない<sup>\*20</sup>。

以上は、ICTsに対するリアリストの反応であるが、議論の前提として、ウェストファリア・システムを所与の不変のものとして見ている点がおおきな特徴であろう。しかし、集团的アイデンティティの一編成様式としてのウェストファリア・システムは、ヘゲモニーによって構成された間主観的な構成物であり、可塑的なものであることは言うまでもないだろう。ヘゲモニーという言葉は余りに多義的だが、ここでは、ホルの説明を借りよう。

「ヘゲモニーは、普遍的なものではなく、ある特定の階級に連続支配を許すために与えられたものでもない。ヘゲモニーは、勝ち取り、再生し、維持しなければならない。グラムシの言葉どおり、ヘゲモニーは『移動する均衡』であり、その中にはさまざまな力関係があつて、均衡は彼我に傾き、一定しない。」<sup>\*21</sup>

つまり、支配的な集团的アイデンティティの編成様式をめぐる政治的陣地戦が常に行われている訳だが、一種の不均衡動学過程の中で長期間にわたってヘゲモニーを勝ち取ってきたのが、ウェストファリア・システムつまり主権国家を前提にした国民意識だったと言って良いだろう。集团的アイデンティティとは、間主観的な関係性概念であるが、その関係性は、基本的に「我々」と「奴ら」との間の境界を設定したり、相互間の相対的位置関係を特定する政治過程の中で成立する。しかも、その関係性をめぐる政治的陣地戦は、「内部／外部」境界線の決定不可能性というアポリアを抱えたまま、「我々とは何者か」を自己定義する集団内部のヘゲモニーをめぐる政治過程とも交錯する。

間主観的な構成物としてのウェストファリア・システムは、地理的領域性と結びつくことで、そうした境界線決定の不可能性を抑圧的な力で隠蔽してきた。また二〇世紀に入ると、ウィルソン主義とレーニン主義との間の緊張関係の下、民族自決権というパンドラの箱が開けら

れ、バルカン化という形で「内部／外部」境界線の決定不可能性がさらに露呈することになる。

そもそも民族自決権は重大な矛盾を含んでいる。ルナンの『国民とは何か』の有名な一節「国民の存在は日々の人民投票によって決まる」という言葉を\*22、今一度検討し直してみればわかることだが、これは明らかにパラドクスを含んだ定義である。つまり、「誰と誰が同一民族または同一国民であるか」を決定する者が同時に決定される者でもあるという、自己言及パラドクスである。しかも集団間の境界が任意で、かつ流動的であるという虚構性が、問題を一層複雑にしている。こうしたアポリアの露出を、レーニン主義とウィルソン主義という進歩主義が防いでいた訳だが、進歩主義を核とする両近代プロジェクトが事実上機能しなくなった今\*23、民族自決権のアポリア性は覆い隠しようがなくなっている。

アポリアは、一国民民主制にも影を投げかけている。近代国民国家の政治ルールは（一国民民主主義も含め）、内部の共通性という虚構の上に、つまり共通の文化コードの存在つまり信用を前提にして交渉の上、成立していた。しかし、先に述べた「内部／外部」境界線の決定不可能性からして、絶え間ない「他者の排除」という政治過程なしでは、一国民民主制は存立し得ない。つまり、絶え間ない排除の産物であるアドホックな「閉じた領域」の中で初めて、民主主義は、成立していたことになるが、その「閉じた領域」が、様々なグローバル化過程の中で、実質的に解体していき、維持できなくなっており、それに伴い「一国民民主主義」（政党政治に代表される公的政治）も重大な危機に直面している。

このようなウェストファリア・システムの変容過程を更に加速化しているのが、情報様式の大きな変化（双方向性、脱領域性等々）であろう。確かに、言語間の障壁がある限り、ポスト・ウェストファリア・システムの方角へ急速に発展していくことはないであろうが、情報様式の大きな変化によって、主権国家によって構成される意味秩序は、長期的に見れば再構成されることを余儀なくされている。国民を含めて、集団的アイデンティティが、言説を通して遂行される社会的交渉の所産であることを念頭に置けば、言語ゲームの様式の変化を通して意味秩序の組み替えが行われつつあることを再度確認しておく必要があるだろう。ただし、この情報様式論に基づく見方も、無批判に受け入れるわけにはいかないだろう。次に、その点について触れる。

## ◆Ⅱ テクノ・オプティミズム：新しい情報様式とグローバル市民社会？

「情報コミュニケーション技術の変化と共に、社会システムの構造的変動が生じてきたし、今、それが起きている！」といったような、いささか技術中心主義的見方とも言える考え方が、インターネットの出現以降、特に勢いを増している。この技術決定論的な見方の代表は、「電子技術による新しい相互依存は、世界を地球村のイメージでつくりかえる。」という、マクルーハンの有名な言葉であろう\*24。

もちろんマクルーハンの言葉は三〇年以上前のものだが、最近になってインターネットの普及等、情報化が深化する過程で、マクルーハンを筆頭とする、いわゆるメディアム理論が再流

行するようになり、構成主義主義的アプローチの台頭と関連しながら、IRの分野にも影響を及ぼし始めている<sup>\*25</sup>。こうしたコミュニケーション様式論の最初の着想は、ハロルド・イニスの諸著作に見られたものだが<sup>\*26</sup>、マクルーハンやハヴロック等によって深められ、最近では、ポスターによって「情報様式 (mode of production) 論」として受け継がれている<sup>\*27</sup>。ポスター自身は、「主体はコミュニケーションの構造および行為の中で形成される」という、構成主義的アプローチを、前面に打ち出している。こうした情報様式論の見方から、「コンピューターや電子メディアを介した新しい情報様式を通して、新しい形態のコミュニティが形成されている」とみる。

情報様式の変化に伴い、時空に関するエピステモロジーが変わる。これは、この種のメディアム理論の中核的命題であろう。この命題は、確かに、よくある技術中立論つまり ICTs をはじめ科学技術が社会に対して中立的であるという考え方に対する有効なアンティテーゼにはなっている。技術中立論は、主体／客体という二項対立を前提にした上で、メディアを客体とし、問題は主体次第という考え方を採用している。しかしメディアム理論は、自明的な現実世界だと思っているものが、自覚しないうちにメディアによって新しい関係性につくりかえられてしまう場合があることを鋭く指摘している。

「口承の世界」から「文字の世界」への移行、つまり音響的な装置を備えた詩的思考から視覚的で物質的な装置を備えた散文的思考への移行に伴い、主観／客観の分離が生じ、さらには概念的思考が誕生し、プラトンはそれを完成させた。というのが、ハヴロックらの説である<sup>\*28</sup>。オングは、ハヴロックらの考えをさらに発展させ、次に起きた情報様式の変化つまり「手書きの世界」から「印刷の世界」への移行を、同様の質的変動ととらえる<sup>\*29</sup>。この変化は、聴覚優先の世界から視覚優先の世界へと移行、さらには閉じたテキストと読者公衆を成立させた。ベネディクト・アンダーソンらが指摘しているように、その読者公衆を介して、印刷資本主義はナショナリズムという新しい間主観性の世界を生み出すことになった<sup>\*30</sup>。

一方で、印刷技術は視覚を他の感覚から切り離すとともに、個人を共同体から切り離したとされる。マクルーハンによれば、それと同じように、電子メディアは、感覚と感覚の相互作用を取り戻し、人間と人間の相互依存関係、それも地球規模の相互依存関係（いわゆる地球村）を回復させるそうだ。

「現在、一世紀以上にわたる電気技術を経た後、我々はその中枢神経組織自体を地球規模で拡張してしまっていて、わが地球に関する限り、空間も時間もなくなってしまった。急速に、われわれは人間拡張の最終相に近づいている。——様々なメディアによって我々の感覚と神経を拡大してきたように、意識の技術的シミュレーションは人間社会全体にまで拡大することになるだろう。」<sup>\*31</sup>

しかし、果たしてそうであろうか？ 声→文字→活字→電子メディア（電話、ラジオ、TV）→インターネット等といったように、支配的なコミュニケーション様式が変化するに伴い、集団



的アイデンティティ形成パターンが変化するという見方は、確かに尤ものであるが（図2）、よく考えると、様々な問題点がある。

メディアの 特性 空間的形態	<タイプⅠ> 1（発信者）× 1 or 少数（受信者）	<タイプⅡ> 1 × 不特定多数	<タイプⅢ> 不特定多数× 不特定多数
地理的区分を伴った 社会<社会Ⅰ>	会話、説教	新聞、ラジオ、TV	
機能的共通性を伴った社会（必ずしも地理的区分を伴わない）<社会Ⅱ>	電話、ポケベル	衛星 TV	INET

図② コミュニケーションにおけるメディアの特性

第一の問題点は、電腦社会に対する樂觀論の根拠が歴史的アナロジーであることからくる限界である。つまり、印刷革命が、カソリックの権力に打撃を与え宗教革命を推進し、更には宗教の時代からナショナリズムの時代への転換を促したように、ICTs 革命は、国家に代表される垂直的階層的組織の時代から水平的ネットワークの時代への転換を促すなど、大きな社会的変動を引き起こしているとするのが、最近の俗説的なアナロジー思考の典型である。さらに言えば、先に述べたような情報様式論に立脚した過去の解釈が、現在起きている変化の準拠枠組みとして適当ではないか、ということである。しかし、このアナロジーは果たして適切なのであろうか？まず第一に、アナロジーはあくまでアナロジーであり、同じことが二度起こる保証はない。こうした思考は、ウェストファリア・システムの向こうに、「新しい中世」といったように<sup>\*32</sup>、中世にアナロジーを求めるのと同じようなもので、歴史の重層化、不可逆性という点を見落としている。

つまり、情報様式における変化が、過去の例、つまり「口承の世界」から「文字の世界」また「手書きの世界」から「活字の世界」への変化と同様に、革命的な変化を実際に引き起こすか、どうかの問題となる。不特定多数対不特定多数の双方向的コミュニケーションを可能にしたこと、従来のリニアな書き物の思考様式に代えてハイパーテキスト形式の思考様式を打ち出したことなどが、よく指摘されるが、それがどれほど革命的であるかは旧来のコミュニケーション様式との関係つまり既存の社会がどのように、またどの程度、それを受容するかによって決まって来るであろう。たとえ、質的变化があったとしても、それ以前の構造との関係、つまり過去の支配的形態との重層性や新旧の層の間の相互作用が問題となる。まず情報様式の変更があったとしても、依然の情報様式がなくなる訳ではない。「口承の世界」の上に、「文字の世界」さらに「電腦世界」が重層的に積み重なっていくとき、従来の情報様式の変容と、新しい情報様式の受け入れ方の違いが重要になってくる。

二番目の問題は、技術と社会との間の関係である。情報様式論は、一種の技術決定論である

が、しかし、ICTsが一義的に社会に影響を与える訳ではないことは言うまでもないだろう。するとICTsを受容する側の社会の問題が重要になってくる。つまり、主権国家システムとか世界システム(資本主義)とかいった、既存の権力構造とICTsとの関係が問題になってくる。主権国家を重視するリアリスト的見方については既に触れたが、繰り返して要約すれば「ICTsは、国家安全保障の最重要課題であることは確かだが、国家が国際社会における重要な主体であることには変わりはない」という見方である。世界システムの分析水準を重視する(ネオ)マルクス主義的見方については後述するが、簡単に要約すれば「ICTsは資本主義のグローバル化をさらに加速化し、貧富の格差拡大という形で社会は両極分解していく」ないしは「ICTsはスーパー・パノプティコン社会を招来する」といった見方になる。

そして最後の問題点になるが、情報様式論に立脚したテクノ・オブティミズムの背後にあるイデオロギー性の問題である。実は、情報化に関するテクノ・オブティミズムには、二つの系譜がある。一つは、脱工業化社会、知識社会ないし「第三の波」といった、反共主義を核にもった情報化社会論の流れであろう。もう一つは、カウンター・カルチャーからの流れで、権力分散化の夢をインターネットに見るというものである。両者とも、ICTsに、理想の未来を見るという意味では、共通している。もっと根幹にある共通点は、コミュニケーションを増やせば、世界は平和になるというコミュニケーション万能主義であろう。

まず前者の系譜についてであるが、このアメリカ的情報社会論は、二重の意味で冷戦という核時代の産物であった。まず、情報化を推進することになる制御通信システム(インターネットも)そのものが、核時代の戦争テクノロジーのスピン・オフから生まれたことは周知の通りである。ARPA-NETは、核の集中的破壊力に対する分散的耐久力を象徴するものであった。ウィリアム・ギブソンらのSFワールドから生まれたサイバースペースという言葉が、ポスト・アポカリプスという設定と連関しているということは<sup>\*33</sup>、科学技術に基づく開発、発展という幻想が終わったことを象徴している。しかし、発展の時代が終わっても、サイバースペースという新たなフロンティアを夢見るというというのが、この種のテクノ・オブティミズムの特徴であろう。ポスト開発時代における開発イデオロギー、つまり進歩・開発という神話を喪失した時代においても電腦空間を新たなフロンティアに見立てようとする考え方は、当然、アメリカというフロンティア社会と強い親和性を持っていることは、言うまでもないだろう。

さらに、また「ダニエル・ベルの脱工業化社会論、ピーター・ドラッカーの知識社会論さらにはアルヴィン・トフラーの第三の波論などは<sup>\*34</sup>、彼らの言説から見て取れるように、反共主義を核にしたアメリカ的情報化社会論だ」というのも、よくある批判だ<sup>\*35</sup>。新保守主義の延長としての情報化社会論が展開されたということは、かつて近代化論の文脈で社会的コミュニケーション論、統合論が流行したのと軌を一にしており、「対立・紛争はコミュニケーションで乗り越えられる」というナイーブな考え方を共有しているように思える。

繰り返しになるが、こうした情報化社会論の核心的命題は、「自由な情報フローが、世界を民主化し平和にする」というものである。例えば、スティーブ・ロス・タイム・ワーナー前会長の言説は、その代表例であろう<sup>\*36</sup>。「タイム・ワーナー社は情報の完全な自由のために尽く

す。競争の上での、アイデア、製品、技術の自由な流通を実現したい。」と述べた上、東欧の民主化革命を念頭に置きながら、「新しい技術をもって、遠隔地をも国際的なメディア・コミュニティの中に加わるようにしたい。世界が一体化するということは、より民主的になることである。」という主旨の演説をしている。

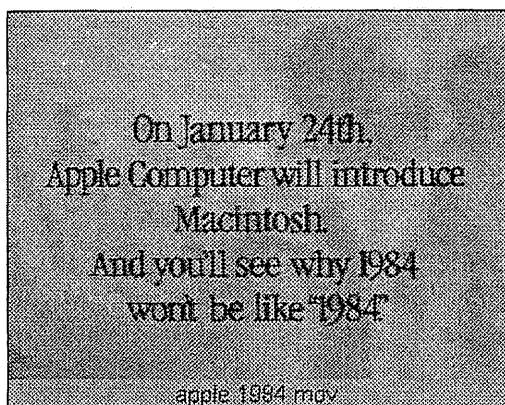
こうした主張は、先のマクルーハンのグローバル・ビレッジ論に、冷戦後のアメリカのデモクラティック・エンラージメント論を加えた形の議論という解釈も可能だろう。つまり、アメリカの巨大情報産業資本の論理は、アメリカのマニフェスト・デスティニー論とも折り合いながら、明るい情報化社会論を押し進めているといっていよう。

さて、もう一つのテクノ・オプティミズムであるが、これは、IR の分野でも最近跋扈し始めたグローバル市民社会論に連なる。つまりインターネットなどのニューメディアを通じた、新たな「想像の共同体」の形成を想定する考え方である<sup>\*37</sup>。いわゆるハッカー文化の流れは、もともと1968年前後の学生運動等の反体制運動に起源をもつことは、これまたよく指摘されるところである<sup>\*38</sup>。そうした流れの一部は、同時にトランスナショナル NGO 同士の双方向コミュニケーションや越境的ネットワークを通じたフェミニズム運動、民主化運動、環境運動等にもつながっている。

アップル社の広告コンセプトは、そうしたカウンター・カルチャー層が共有する考え方と親近性があることは、よく知られている<sup>\*39</sup>。ビデオ・クリップ1は、ジョージ・オーウェルの小説1984年をパロディーにした有名な広告である<sup>\*40</sup>。ビッグ・ブラザーを彷彿とさせるスクリーン上の人物が、「史上初めて、ここにただ一つのイデオロギーに基づく楽園が誕生したのだ」等と叫ぶ。その声を従順に聴く無表情の男たちの後方から、マッキントッシュのTシャツを着た女性が駆け込んできて、手元のハンマーで、ビッグ・ブラザーに一撃を加える。その後に出てくるのが、図版の文句である。「中央権力による支配、監視からの脱却」というイメージを、前面に押し出している<sup>\*41</sup>。

そしてビデオ・クリップ2は、映画監督スパイク・リーに語らせながら、マルコム X のスナップ写真等を交えつつ、パワーという文字とマッキントッシュというロゴをだぶらせたものである。そのままずばり「PC によるエンパワーメント」というイメージを表現した CM の一齣である。ICTs を民主化の推進力とする見方は、特定の客層を狙った販売戦略のための方便ではあろうが、それ以上に、先の反共主義的情報化社会論と共有する時代観によるものと思える。

それは、一言で言えば、「情報化により個人の力は増大する」というナイーブな見方をあわせもったポスト・マルクス主義的時代観であろう。つまり、「産業化の時代は終わって情報化の時代になったのだから、産業化時代の階級対立は重要な問題ではなくなった」という考え方である。ドラッカーの言い方を借りるならば、これからの知識社会は、知識が重要なポスト資本主義社会であり、資本主義とか共産主義とかいった概念は、時代遅れである、ということである。公文俊平等は、こうした考え方を、さらに戯画的に「市民革命の時代からネティズン(智民)革命の時代への移行」といった表現の仕方をしている<sup>\*42</sup>。



図③ ビデオ・クリップ1



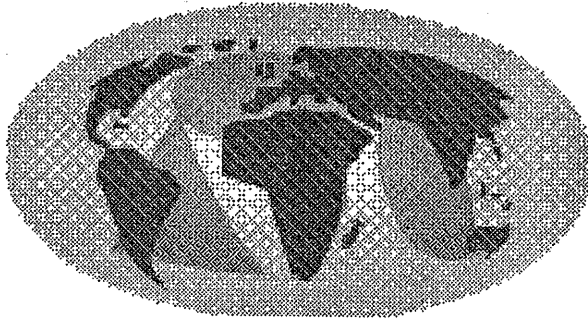
図④ ビデオ・クリップ2

もう一つのポスト・マルクス主義的歴史観は、1968年世代のニュー・レフトの系譜である。つまり、「階級政治」の制度化また「階級政治」のスターリン主義化の後に、ポスト階級政治として登場した「新しい社会運動」、またその後継であるアイデンティティ・ポリティクスである<sup>\*43</sup>。まず、フーコー等の問題提起やフェミニズム運動の成果として、公私区分は破砕され、全領域の政治化が起こり新しい政治空間が切り開かれた。それに伴い、新たなアイデンティティの承認と差異の主張ができるような新しい政治空間が生れた。またく支配的な語り口からの解放を目指し、支配的な文化コードの読み替えにより、その文化コード体系そのものをずらし脱構築し再編成していく作業も行われるようになっていった。いわゆる二項対立とそれに基づく固定したアイデンティティの解体であるが、こうした思想状況は、マーク・ポスターの言う電子メディアを介した「主体の解体」といった状況と適合することになる。ここに、もう一つのテクノ・オプティミズムが成立し、グローバル市民社会論と合流することになる。

この種のテクノ・オプティミズムには、確かにそれなりに根拠があり、主張を裏付けるような現象が始まってはいる。トランスナショナル NGO (TNGO)、正確にはトランスナショナル社会運動(TSM)を通じた脱領域的アイデンティティの形成といった動きが、そうした事例である<sup>\*44</sup>。もちろん、TSM は、インターネット等が引き起こされた訳ではないが、ICTs により、そうした運動のネットワーク形成、資源動員がより容易になり、加速的に越境的なネットワークが出来てきたと言える。

代表的な事例としては、世界大の NGO ネットワーク APC (the Association for Progressive Communications) が挙げられる<sup>\*45</sup>。APC は、1990年に、NordNet (スウェーデン)、Web (カナダ)、Alter Nex (ブラジル)、Nicaro (ニカラグア)、Pegasus (オーストラリア)、Green Net (イングランド)、Institute for Global Communications (IGC) (アメリカ)を中心に、市民運動のための本格的なグローバル・ネットワークとしての活動を始めた<sup>\*46</sup>。今ではメンバー・ノードだけでも22カ国に及び、アクセスは133カ国からあるという。ウェブ・サイトでの内容紹介によると、APC の目的は、「情報、コミュニケーション技術の利用を通して、組織、社会運動、個人のエンパワメントを行い、結果として人類の発展、社会正義、参加型民主

主義、持続的社会に貢献できるような戦略的コミュニティをつくる」ということだそうだ。



図⑤ APC



図⑥ 地球の友

中でも、最大手のアメリカに拠点を持つ IGC は<sup>\*47</sup>、ウェブ・サイトを見てもわかるように、ピース・ネット、女性ネット、エコ・ネット<sup>\*48</sup>等を立ち上げていて、様々な社会運動を束ねている点でユニークである。このネットからリンクがはってある NGO 数は、環境保護運動から人権擁護団体、平和運動さらにはフェミニズム運動まで三百以上にのぼる。このウェブ・サイトは、新しい社会運動をとりまく複数のアイデンティティの大連合を象徴しているかのようである。

こうした複数の 이슈をカヴァーした越境的なネットワークにグローバル市民社会の萌芽を見ることができるか、どうかであるが、例えば、エコロジー運動がよく使う「アイコンとしての地球」(図を参照)に、脱領域的なアイデンティティの象徴を読みとることは、不可能ではないだろう。また国家という限定的領域の制約から比較的自由であるということは、政治的な効果にも転化しうる。つまり、当該国の中で、手段を尽くしても改善が不可能な時、国外のネットワーク上の団体と連携して、その国に対して圧力をかけるといったブーメラン効果を使うことができるからである<sup>\*49</sup>。つまりアカウンタビリティの欠如という問題も一方ではあるものの、NGO によるグローバル・ネットワークは、一国単位の民主制の欠陥を補う形で、人権・環境レジームの構築において重要な役割を果たしている。そうした意味で、ICTs は、人権レジーム等の形成を一層促したとも言える。

しかし、アイデンティティ・ポリティクスのラディカル化の先、つまりコスモポリタニズムの前には、グローバル・レベルでの不平等拡大という＜未完の近代＞問題が立ち塞がっている。つまり、こうしたラディカル化の結果、ポスト・マルクス主義的社会運動は「ポスト・モダニズムのアポリア」を自らにつきつけることになったのである。アポリアとは、「ポスト・モダニズムと＜未完の近代＞問題の間のジレンマをどう解消するか」ということである。つまり、「固定化したアイデンティティの解消（流動的アイデンティティの担保）」というポスト

・モダニズムの課題と「我々と他者という集団的同一性を前提にした相互間の不平等性の解消」といった近代的課題、この双方の相矛盾する課題を、どう解消するのか？特に＜未完の近代＞問題は、単なるテクノ・オプティミズムでは解消しないことがわかってきた。

この問題と関連して、ガヤトリ・スピヴァックは、グローバル・ビレッジ論に対して、以下のような痛切な批判を加えている。

「生命の多様性を電子化する試みは植民地主義の最新のトリックである。——どのような利益のもとで、またどのような関係をつくりあげるために、グローバル性が引き合いに出されるのか？——グローバリティは、地球社会の金融化という文脈で引き合いに出されるのである。」<sup>\*50</sup>

次の節では、「地球社会の金融化」という文脈におけるマージナル化されたローカル・アイデンティティの問題について、触れる。

### ◆Ⅲ テクノ・ペシズム：分極化と周辺的トライバリズム

貧富の格差が情報技術、情報基盤の有無により更に拡大するという悲観的な見方は、コミュニケーションに関する批判的な政治経済学の代表的な見方である。その代表格は、ハーバート・シラーであろう。コミュニケーションの商業化とそれに伴う巨大資本による支配を批判し続けてきた彼は、従来のマス・コミュニケーションだけではなく、ニュー・メディアにおいても同様の現象が起きていると指摘する<sup>\*51</sup>。ある意味で、前節での議論とは一八〇度違う、情報化社会のイメージである。前節の議論が、「コミュニケーションによって同質化、民主化が可能である」という議論に対して、これに対する批判的見解は、階級等によるコミュニケーション体系の分断化を強調する。例えば、プレヒトの以下のような見解は、その代表的な例であろう。

「社会は、対立する階級に分割されている限り、共通のコミュニケーション体系を共有することはできない。」<sup>\*52</sup>

確かに、サイバー・スペースにおけるオルタナティブ・メディア等は、マス・メディアの階層的、一方通行的コミュニケーションに代わる、水平的、双方向的コミュニケーションを提供する面をもっているが<sup>\*53</sup>、一方で、サイバー・スペースの中にも、従来の階層的、一方通行的コミュニケーション・モードが浸透していつている。従来の権力関係が、サイバースペースに浸透する理由の第一は、情報過多の状況にある。つまりデータ・スモッグといわれる情報過多の状況の中で<sup>\*54</sup>、何が信頼すべき情報かを見分けるためのコストが著しく高まる時、従来のマスメディア等を信頼性のあるものとして選択する傾向があるということである。匿名的状况の中で、信頼される情報源は、やはり往々にして既存のマスメディアや大手のNGOに偏ってく

る。

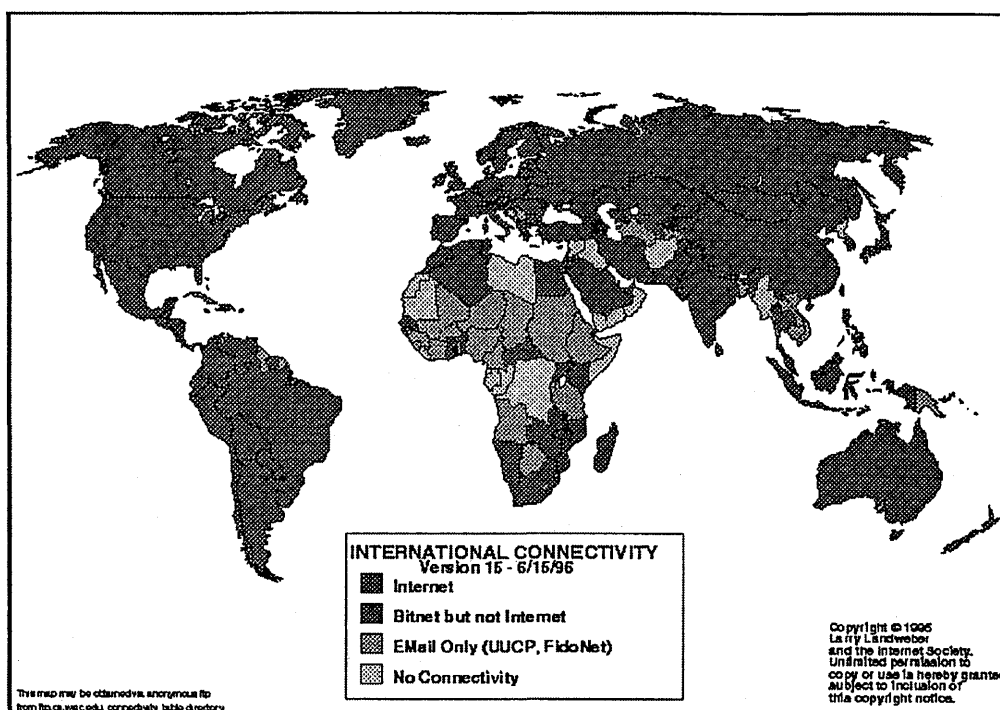
またサイバー・スペースも、巨大情報産業資本の支配という点では、マス・コミュニケーションと同じ運命を辿っているように見える。そもそもサイバー・スペースを支える情報通信回線は、殆ど巨大通信産業が握っているし、そこで流れる情報コンテンツそのものも、大企業が握っているといって過言ではないだろう。例えばメジャーな検索サイトで見えるバナー広告は、そうした現象を示している象徴と言えないだろうか。

サイバー・スペースでの、既存の権力関係、コミュニケーション・モードの再生産といった問題は、そのほかに、旧来の政治の浸透とか<sup>\*55</sup>、ウェストファリア・システムの意味秩序の浸透、さらには家父長制の浸透等々、数えて言ったらきりがないが、その中でも深刻な問題は、情報リッチと情報ブアの格差拡大であろう。サイバー・スペースは、結局、現実空間における南北両極分解を反映しているばかりか、貧困層の更なるマージナライゼーションを引き起こしている。サイバー・スペースは、現実空間の不平等の拡大再生産をしている。参考地図が示しているように、アフリカ大陸の一部は、アンプラグを強制された形になっており、グローバル・コミュニケーションのネットワークの中における沈黙圏 (zone of silence) となっている<sup>\*56</sup>。ユネスコが提唱した新世界情報コミュニケーション秩序 (New World Information and Communication Order, NWICO) のイメージとは対極の方向へ、コミュニケーションに関する世界秩序は動いているといつて良いだろう。そもそも NWICO 構想に対しては、英米諸国は、情報の自由な流通を妨げるものとして、反対し、その問題がこじれ UNESCO から脱退した経緯は有名だ<sup>\*57</sup>。

一方で、アメリカは、「知的所有権の貿易関連側面に関する協定」(Agreement on Trade-related Aspects of Intellectual Property Rights, TRIP) のような知的財産に関する国際レジームの強化を通じて、別の NWICO を打ち立てようとしている。少数の富裕な者たちが知的所有権保護を通じて自分の財を守ろうとしながら、同時に、彼らは政治的自由を守るために自由な情報の原理を守るよう主張する<sup>\*58</sup>。要するに、アメリカの商業的利益と、メディアに関する政治哲学が一致しているということである。

この結果、情報の自由な流通つまり情報産業の規制緩和、競争激化は、南北間のコミュニケーションを著しく非対称的な一方通行的なものにしてしまった。特に冷戦後は、資源のない<南>の地域は、その戦略的価値をますます下げ、南北格差拡大の過程で、見捨てられている訳だが、グローバル・コミュニケーションの領域でも、そうした状況が反映し、UNESCO が提唱していた NWICO とは対極の方向に移ろうとしている。

NWICO の対極ということになると、文化帝国主義論も、その一つのイメージであろう<sup>\*59</sup>。またサイバースペースにおけるコミュニケーションと権力ということになると、文化帝国主義以外にも、英語帝国主義の問題も避けて通れない問題の一つである<sup>\*60</sup>。文化帝国主義の問題と英語帝国主義の問題は相互に関連しており、先にふれたコンテンツの偏りの問題につながっていくことになる。サイバー・スペースで「グローバル市民社会」を構成する多くの者は、英語を自由に操れるエリート、特に欧米留学組等、文化資本を投資された者である。英語圏にお



図⑦ インターネットの接続状況  
(<http://www.isoc.org:80/images/mapv14.gif>)

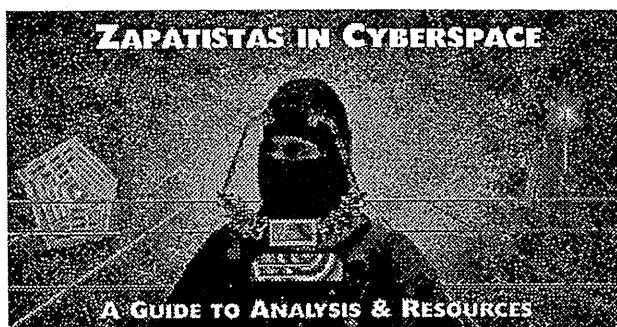
る支配的な見方に慣れていく過程で、彼らの考え方は、大体似たようなものになっていく。これは上からのグローバル・ガバナンスを主導するエリートばかりではなく、トランスナショナル NGO ネットワークを牽引する対抗エリートについても言えることである。結局、サイバー・スペースをとりまくグローバル市民社会なるものは、良くて多極共存型民主主義（consociational democracy）と類似の権力構造をもっている。各言語によって分割化されたネット・ブロックつまりローカル言語集団の分断化がまずあり、その上に、それぞれのグループの代表が英語帝国主義文化を共有するエリートによる協調体制があると言って良いだろう。

サイバースペースと言うと、WWW だけを想定しがちであるが、サイバースペースの政治経済学ということになると、電子金融取引、たとえば SWIFT（Society for World-wide Interbank Financial Telecommunications）システムや電子マネーに伴う電子取引革命などは、極めて重要なポジションを占めている。スーザン・ストレンジも最近強調していることであるが、情報技術革新（コンピューター、チップス、通信衛星さらには金融取引そのものの技術革新）が金融市場と金融制度の作動様式を変化させ、結果として国際政治経済の構造的権力の配分を変動させていっている<sup>\*61</sup>。加えて、これらの動きは、経済のハイパー・リアリティ化といった問題を孕んでいる。デリバティブを含めた電子金融取引は、ボードリヤールの言うシミュラクルの段階に達しているといつてよく、マネーは何かある現実（経済的ファンダメンタルズ）を表象＝代行しているのではなく、代行すべき現実自体とは切り離されて表象そのものが



暴走している状態といっただろう\*<sup>62</sup>。カジノ資本主義は、経済のこうしたポスト・モダン化と密接に関連しながら、次第に市場取引価格の乱高下とその拡大波及といった制御不能状態を呈し始めていることに注意する必要があるだろう。ヴァーチャル・エコノミー化の動きは、最近の電子マネー化により加速化し、さらに制御不能なものになってきていることは周知の通りである。

規制緩和と同時に起きている、こうしたヴァーチャル・エコノミー化は、社会経済の両極分解を更に加速化していることは言うまでもない。その過程で、集团的アイデンティティ・ポリティクスの領域では、トライバル化が生じている。グローバル化の過程で、ローカル・アイデンティティが復活するという議論は、最近随所で見られるが\*<sup>63</sup>、その典型例として、よく引き合いに出されるのが、サパティスタ国民解放軍のケースであろう\*<sup>64</sup>。サパティスタの場合、先住民というローカル・アイデンティティの承認等、旧来の領域的アイデンティティ・ポリティクスの性格と同時に、NAFTAという経済のグローバル化に反対しているという点で、先に挙げた脱領域的アイデンティティ（コスモポリタニズム）とは対極の方向、つまり領域的アイデンティティへの回帰の性格を色濃くもっている。しかし、こうした領域的アイデンティティの主張を、脱領域的と思われていたサイバー・スペースで展開しているところに、もう一つの大きな特徴があると言えるだろう\*<sup>65</sup>。



図⑧ サパティスタのアイコン



図⑨ 東ティモールのアイコン

脱領域的サイバー・スペースにおける領域的アイデンティティの強化といった分離独立運動の現象は、他にもクルド、東ティモール、西サハラ——等々、枚挙に遑が無い\*<sup>66</sup>。もちろん、ローカル・アイデンティティを主張をする、こうしたマージナル化された人々の大半は、強制的なアンプラグの状態にある訳であるが、スキルをもった人によって、サイバー・スペースで曲がりなりにも彼らの声が聞き取れることが可能になったということは確かに注目すべきことであろう。

まず、領域的アイデンティティの再主張という問題は、単にナショナリズムの残滓ということではなく、先に触れたウェストファリア・システム自身が抱える「境界の決定不可能性」というアポリアつまり、繰り延べされ続ける永遠の＜未完の近代＞問題から派生するものである。それに、グローバル化過程におけるアイデンティティの解体、喪失というポスト・モダン

的問題、さらに貧困化という、もう一つの＜未完の近代＞問題も絡み、ローカル・アイデンティティ・ポリティクスのラディカル化が生じているといつてよい。もちろん、こうした一連の動きの要因を、ICTsにのみ求めることは誤りであるが、ローカル・アイデンティティの政治を加速化していることは確かであろう。

ベンジャミン・バーバーは、こうした動きを部族主義として、マックワールド (McWorld) 化と同様、民主主義に対する脅威ととらえる<sup>\*67</sup>。逆に、サミール・アミンは、ポピュラー・ナショナリズムを、世界システムの不均等発展の状況から見て、コスモポリタニズムへ至るための必要な中間段階と、とらえる<sup>\*68</sup>。どちらが適切な解釈なのか？あえて言えば、後者だろうか。グローバル化の中で雲散霧消する恐れのあるアイデンティティの拠点をローカルなものに求めることは、ある意味で不可避であろう。しかし、一方で、従属的な場所に居る者が、＜支配／従属＞の状況をことさら告発し、被支配者のルサンティマンを歌い上げ、ポピュラー・ナショナリズムを開花させた場合、次には自らが、内なる敵に対して呵責なき弾圧を行う抑圧者に転化する危険性もある。かと言って、後者の危険性を察知し、敢えて宙ぶらりんのアイデンティティを選ぶことは、如何なる国からも保護を受けられな文字通りの無国籍者 (stateless person) という無権利状態を招きかねない。カルチュラル・スタディーズなどで流行してるディアスポラという用語は、そうした現実を無視していると言える。そこで残された選択肢は、とりあえずのポピュラー・ナショナリズムであろう。

ただ、それだけでは、コスモポリタニズムへの階段を進むことはできない。むしろマージナル化されたローカル・アイデンティティの再構築とその承認を求めた運動は、得てして排除を通じた「閉じた領域」の維持という、ウェストファリア・システムと同じ論理にはまることになる。クルド人同士の止めどのない覇権争い、東ティモール人によるインドネシア人に対する報復、IRA 内の内ゲバなど、数えていったらきりがない。

閉じた領域的アイデンティティを避け、開かれたアイデンティティを模索する必要がある。 「開かれたアイデンティティ」という言葉は一見撞着語法であるように見えるが、「純粹化」の危険を回避するためには<sup>\*69</sup>、境界の流動性・柔軟性を確保することは非常に重要なことであろう。そこで、周辺化されたローカル・アイデンティティにとって、世界システム中心部の脱領域的アイデンティティ・ポリティクスとの提携は非常に重要な意味をもつことになる。実際に、一部のポピュラー・ナショナリズム、ないしは領域的トライバリズムは、既に脱領域的コスモポリタニズムと連携しているケースが見られる。

既に触れたサバティスタの場合、La Neta というメキシコのオルタナティブ・ネットワークを通じてトランス・ナショナルな連携を広げていった訳であるが<sup>\*70</sup>、La Neta 自体が IGC によって支援されてきたものであり、APC ともリンクしている。IGC は、東ティモール・ネットワーク (ニューヨーク) を支援しているが<sup>\*71</sup>、このネットワークが、また、東ティモール難民が最も多いダーウィンにある東ティモール国際支援センターとのリンクをもっている<sup>\*72</sup>。このように東ティモール支援のネットワークは、ニュージーランド、ポルトガル、アメリカ、オーストラリア等に広がっている。

東ティモールの分離独立運動自体は、典型的な領域的アイデンティティの承認を求める運動ではあるが、それは一方で、このように先進国に中心をもつ脱領域的なネットワークにもつながりをもっている。領域的トライバリズムと脱領域的コスモポリタニズムの両者を繋ぐメタ価値は、例えば、人権であろう。このように、人権（ジェンダーを含む）といったメタ価値を介して、領域的アイデンティティと脱領域的アイデンティティが、提携、協力していくことで、また開かれたアイデンティティが担保される可能性も開かれてくるのではないだろうか。さもなければ、グローバル資本主義の残酷な論理が、マージナルなローカル・アイデンティティを、純粋さを追求する暴力の世界に、ますます追い詰めていくことになってしまう。

#### ◆結び：新しい情報様式の光と影

以上、情報コミュニケーション技術の変化とウェストファリア・システムの変容との関係について、リアリストの見方、情報様式論の見方、そして批判的政治経済学的見方から、それぞれ見てきた。このいずれか一つが正しいという訳ではないだろう。例えば、短期的には、リアリスト的な見方が幾つかの点で適当であるかのように見えるが、長期的には、社会的に構成されたウェストファリア・システムやそれを支える政治経済権力構造に対して、ICTsが及ぼす影響力を無視できないという点では、情報様式論の見方また批判的政治経済学的見方が適当であろう。実際には、情報の背後にある諸権力のベクトル、つまり世界資本主義、国家、そして(世界)市民社会の諸力とのせめぎ合いの中で、ヘゲモニーが移行していくのだろう。しかし、諸力の複雑な連関の中で確立されたヘゲモニーは常に不安定であり、今後、アイデンティティ・ポリティクスの方向性についても、先行きは不透明で予断を許さない。

先述したように、ヘゲモニーが常にシフトしているという意味では、グローバル化の過程において国家という「閉じた領域」は実質的に解体の方向に向かっており、ウェストファリア・システムは再編成を余儀なくされている。それに伴い、アイデンティティ・ポリティクスは、コスモポリタニズムとショーヴィニズムという二つの形態をとり始めている。この二つの形態は、一見すると相矛盾した現象ではあるが、本質的にはグローバル化というコインの裏表である<sup>\*73</sup>。脱領域的コスモポリタニズムと領域的トライバリズムという、二つの政治的アイデンティティのベクトルは、新しい情報様式によって、より強められており、時には両者の接点も見える。

両者が時には補完しあうような関係を取り結ぶ中で、複数のアイデンティティが柔軟な同盟を形成し、それが、積極的な境界侵犯を行いながら内側と外側を繋ぐことで、矛盾を抱えた地理的境界を崩していくチャンスもあるだろう。この点とも関連して、ラクラウは次のような示唆を与えてくれている。

「普遍は個別とは共約不可能であるが、しかし普遍は個別なしには存在し得ない。どのようにして、このような関係が可能なのであろうか？このパラドクスを解くことはできない、しか

し解が存在しないということが民主主義のまさに前提条件なのだというのが、私の解答だ。<sup>\*74]</sup>

つまり脱領域的コスモポリタニズムは、領域的トライバリズムとは共約不可能ではあるが、後者なしには存在し得ない。この解なしの状態が、グローバル・デモクラシーの前提条件となるのではないかということである。確かに両者の変革的な補完関係が、ポスト・ウェストファリア・システムのプロト・タイプを準備しつつあると見るには、まだ時期尚早であろう。しかし、少なくとも、新しい情報様式の影響も受け、国民国家という領域的アイデンティティの一形式は、他の新たな集団的アイデンティティの形成と交錯しつつ、その再編成を余儀なくされているということは言える。その過程で、遅かれ早かれ、ポストという接頭辞のついた言葉も廃れていくことだろう。

#### 注

- \* 1 David Harvey, *The Condition of Postmodernity*. (Cambridge, Blackwell, 1990); Frederic Jameson, *Postmodernism, or the Cultural Logic of Late Capitalism*. (Durham, NC: Duke University Press, 1991)
- \* 2 例えば, Andrew Linklater, *The Transformation of Political Community: Ethical Foundations of the Post-Westphalian Era*. (Cambridge: Polity Press, 1997).
- \* 3 Daniel Bell, *The Coming of Post-industrial Society: A Venture in Social Forecasting*. (N. Y.: Basic Books, 1972)
- \* 4 Peter F. Drucker, *Post-Capitalist Society*. (N.Y.: Harper Collins, 1993)
- \* 5 For a survey of Post-Fordism, see Ash Amin (ed.) *Post-Fordism: A Reader*. (Oxford: Blackwell, 1994).
- \* 6 Winfried Ruigrok and Rob van Tulder, *The Logic of International Restructuring*. (London: Routledge, 1995), p. 32.; Ray Kieley, "Globalization, Post-Fordism and the Contemporary Context of Development," *International Sociology*. Vol. 13 No. 1 (1998), pp. 95-115
- \* 7 佐藤誠三郎の以下のような文章は、その代表的なものであろう。「国際関係において、企業や NGO のような非国家的主体の役割が増大し、主権国家の機能が次第に弱まる傾向にあるのは事実である。しかし、国際関係が主権国家を基本単位として展開されることは予想しうる将来にわたって変わらないであろう。——世界政府の実現のためにコミットする姿勢を持たず、従って自己を超え人間を超えたものとの結びつきのない「世界市民」は、日本への帰属を無自覚に前提として観念の遊びにすぎないのである。」佐藤誠三郎「新・一党優位体制の開幕」『中央公論』1997年4月
- \* 8 John Gerald Ruggie, *Constructing the World Polity*. (London: Routledge, 1998); Thomas J. Bierstecker and Cynthia Weber (eds.) *State Sovereignty as Social Construct*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1996); A. Wendt, "Constructing international politics," *International Security* Vol. 20 No. 1 (1995), pp. 71-81; A. Wendt, "Identity and Structural Change in International Politics," in Yosef Lapid and Friedrich Kratochwil eds. *The Return of Culture and Identity in IR Theory*. (Boulder: Lynne Rienner, 1996), pp. 47-64.; Nicholas Onuf, *World of Our Making: Rules and Rule in Social Theory in International Relations*. (Columbia: University of South Carolina Press, 1989); Ted Hopf,

- "The Promise of Constructivism in International Relations Theory," *International Security* Vol. 23 No. 1 (1998), pp. 171-200.; Peter Katzenstein, (ed.) *The Culture of National Security: Norms and Identity in World Politics*. (N.Y.: Columbia University Press, 1996) etc.
- \* 9 Joshua Meyrowitz, "Medium Theory," in David Crowley and David Mitchell, *Communication Theory Today*. (Cambridge: Polity Press, 1995), pp. 50-77.
  - \* 10 Peter Golding and Graham Murdock, "Culture, Communication, and Political Economy," in James Curran and Michael (ed.) *Mass Media and Society*. 2nd ed. (London: Arnold, 1996), pp. 11-30.; Edward A. Comor (ed.) *The Global Political Economy of Communication: Hegemony, Telecommunication and the Information Economy*. (London: Macmillan, 1994).
  - \* 11 Eugene B. Skonikoff, *The Elusive Transformation: Science, Technology, and the Evolution of International Politics*. (New Jersey: Princeton University Press, 1993), p. 225.
  - \* 12 Johanna Neuman. *Lights, Camera, War: Is Media Technology Driving International Politics?* (London: St. Martin's Press, 1996). (北山節郎訳『情報革命という神話』柏書房, 1998年)
  - \* 13 Joseph S. Nye Jr. and William A. Owens, "America's Information Edge," *Foreign Affairs*. Vol. 75 No. 3 (1996), pp. 20-36.
  - \* 14 John J. Arquilla and David F. Ronfeldt, *In Athena Camp: Preparing for Conflict in the Information Age*. (Santa Monica, LA: Rand, 1997), p. 142.
  - \* 15 Arquilla and Ronfeldt, *ibid.* p. 145.
  - \* 16 Arquilla and Ronfeldt, *ibid.* p. 157.
  - \* 17 Arquilla and Ronfeldt, *passim*.
  - \* 18 Gary Rodan, "The Internet and Political Control in Singapore," *Political Science Quarterly*. Vol. 113 No. 1 (1998), pp. 63-89. (Rodan 1998)
  - \* 19 For an example, see Michael Whine, "The Far Right on the Internet," in Brian D. Loader (ed.) *The Governance of Cyberspace: Politics, Technology and Global Restructuring*. (London: Routledge, 1997), pp. 209-227. (Lison and Gayton 1998)
  - \* 20 Sylvia Ostry and Richard R. Nelson, *Techno-Nationalism and Techno-Globalism*. (Washington, D. C.: Brookings Institute, 1995) (新田光重訳『テクノ・ナショナリズムの終焉』大村書店, 1998年, 第3章).
  - \* 21 Stuart Hall and Tony Jefferson (eds.) *Resistance through Rituals*. (London: Hutchinson, 1975). p. 40.
  - \* 22 Ernest Renan, *Qu'est-ce qu'une nation?, et autres essais politiques*. (Paris: Presse Pocket, 1990/1887). (鵜飼哲他編訳『国民とは何か』インスクリプト, 1997年)
  - \* 23 Immanuel Wallerstein, *After Liberalism*. (N.Y.: The New Press, 1995), pp. 108-122.; Gilbert Rist, *The History of Development: From Western Origins to Global Faith*. (London: Zed Press, 1997)
  - \* 24 McLuhan, M. (1962) *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. Toronto: University of Toronto Press. (森恒治訳『グーテンベルクの銀河系』みすず書房, 1986年)
  - \* 25 代表的な例としては, Deibert, Ronald J. (1997) *Parchment, Printing, and Hypermedia: Communication in World Order Transformation*. N. Y.: Columbia University Press.
  - \* 26 Harold Innis. *Empire and Communication*. (Toronto: Press Porcupine, 1950/1986); Harold Innis, *The Bias of Communication*. (Toronto: University of Toronto Press, 1951)
  - \* 27 Mark Poster, *The Mode of Information. Poststructuralism and Social Context*. (Chicago: Chicago University Press, 1990), p. 11.

- \* 28 Eric A. Haverock, *Preface to Plato*. (Mass.: Harvard University Press, 1963). (村岡晋一訳『プラトン序説』新書館, 1997年。)
- \* 29 Walter J. Ong, *Orality and Literacy: The Technologizing of the World*. (N.Y.: Menthuen, 1982)
- \* 30 Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*. 2nd ed. (London: Verso, 1991). (白石隆・白石さや訳『想像の共同体 (増補版)』NTT出版, 1997年)
- \* 31 Marshall McLuhan, *Understanding Media: The Extension of Man*. (N.Y.: McGrawhill, 1964). (栗原裕他訳『メディア論』みすず書房, 1987年, 3頁。) 訳文は一部変えた。
- \* 32 Hedley Bull, *The Anarchical Society: A Study of Order in World Politics*. (London: Macmillan, 1977), p. 264.
- \* 33 William Gibson, *Neuromancer* (N.Y.: Ace, 1984) (黒丸尚訳『ニューロマンサー』ハヤカワ文庫, 1986年)
- \* 34 Daniel Bell, *op.cit.*; Alvin Toffler, *The Third Wave*. (N.Y.: William Morrow, 1980); Peter F. Drucker, *op. cit.*.
- \* 35 仲田誠『情報社会の病理』砂書房, 1997年, 32頁。
- \* 36 David Morley and Kevin Robins. *Spaces of Identity: Global Media, Electronic Landscapes and Cultural Boundaries*. (London: Routledge, 1995), pp. 11-12.
- \* 37 V. J. David Bell and Robert Logan, "Communication and Community: Promoting World Citizenship through Electronic Communications," in Joseph Rotblat (ed.) *World Citizenship: Allegiance to Humanity*. (London: Macmillan, 1997); Mark Esdale, "A Global Community through Electronic Communications," in J. Rotblat ed. *ibid*.
- \* 38 例えば, 古瀬幸広, 廣瀬克也『インターネットが社会を変える』岩波新書, 1996年。
- \* 39 創業者の一人スティーブ・ジョブ自身が, インド放浪, コミュニオン生活という典型的なカウンター・カルチャーの通過儀礼を経てきている。
- \* 40 CMの動画(Quick-time Movie ファイル)は, 以下のアドレスで入手可能。http://www.wider.com/~uriah/apple-qt/
- \* 41 一方で, 情報化により道具的理性の支配と監視社会化が更に進行するというもうよくある批判の一つであり, ヴィリリオの著作などは代表的な例であろう。Paul Virilio, *Cybermonde, la politique du pire entretiens avec Philippe PETIT*. (Paris: Textuel, 1996) (本間邦雄訳『電脳世界』産業図書, 1998年) 確かにネットワークが巨大になればなるほど, データ・ベースに膨大な個人情報蓄積されていく。その一方で, 外部からアクセスできないデータ・ベースを政府や巨大資本がそれをコントロールするとなると, スーパー・パノプティコン化の問題は, 決して杞憂ではなくなってしまう。
- \* 42 公文俊平『情報文明論』NTT出版, 1994年や公文俊平編『ネティズンの時代』NTT出版, 1997年など
- \* 43 Enrique Larana, Hank Johnston, and Joseph R. Gusfield, *New Social Movements: From Ideology to Identity*. (Philadelphia: Temple University Press, 1994).
- \* 44 Jackie Smith, Charles Chatfield, and Ron Pagunucco eds. *Transnational Social Movements and Global Politics: Solidarity beyond the State*. (N.Y.: Syracuse University Press, 1997).
- \* 45 APCについては, Susanne Sallin, "The Association for Progressive Communications: A Cooperative Effort to Meet the Information Needs of Non-Governmental Organizations" February 14, 1994. anonymous FTPで, the CIESIN Human Dimension Kiosk (FTP. CIESIN.ORG) から入手可能。
- \* 46 http://www.apc.org.

- \*47 <http://www.igc.org>.
- \*48 EcoNet was created with the funding from the Apple Corporations in 1982. Susanne Sal-  
lin, *op. cit.*
- \*49 Margaret E. Keck and Kathryn Sikkink, *Activists Beyond Borders.: Advocacy Networks  
in International Politics*. (Ithaca : Cornell University Press, 1998), p. 13.
- \*50 Gayatri Chakravorty Spivak, "Cultural Talks in the Hot Peace : Revisiting the "Global  
Village" " in Pheng Cheah et al. eds. *Cosmopolitics : Thinking and Feeling Beyond the  
Nation*. (Minneapolis : Minneapolis University Press, 1998), pp. 329-343.
- \*51 Herbert I. Schiller, *Culture Inc. : The Corporate Takeover of Public Expression*. (N.Y. :  
Oxford University Press, 1989), p. 111. ; Herbert Schiller, *Information Inequality : The  
Deepening Social Crisis in America*. (N.Y. : Routledge, 1996) ; Michael Perelman, *Class  
Warfare in the Information Age*. (London : Macmillan, 1998) ; William Wresch, *Discon-  
nected : Have and Have-nots in the Information Age*. (New Brunswick, New Jersey : Rut-  
gers University Press, 1996). ; Trevor Haywood, "Global networks and the myth of equal-  
ity," in Brian D. Loader ed. *Cyberspace Divide*. (London : Routledge, 1998).
- \*52 Bertolt Brecht, *Brecht on the Theatre : The Development of an Aesthetic*. ed. and trans. by  
John Willet. (London : Methuen, 1964), p. 196. (原典では, Bertolt Brecht, *Werke. Band 23.  
Schriften 3 1942-1956*. (Frankfurt : Suhrkamp Verlag, 1993), pp. 87-88.)
- \*53 旧ユーゴの紛争に対して, より正確な情報を流そうという試みをしているプレス・ナウの試  
みなども, そうした例であろう。 <http://www.dds.nl/~pressnow>. また, インドネシアの週  
刊雑誌テンポに見られるように, スハルト体制下で発行禁止処分を受けた後, インターネッ  
ト版を出し, 民主化につながる契機を作ろうとした例も, その一つかもしれない。 <http://www.tempo.co.id/>
- \*54 David Shenk, *Data Smog : Surviving the Information Glut*. (San Francisco : Harper Edge,  
1997).
- \*55 Hill and Hughes, *Cyberpolitics*. (Lanham : Rowman & Littlefield, 1998), p. 186.
- \*56 Robin Mansell and Utah Wehn (eds.) *Knowledge Societies : Information Technology for  
Sustainable Development*. (Oxford : Oxford University Press, 1998), p. 197.
- \*57 Mark D. Alleyne. *International Power and International Communication* (London : Mac-  
millan 1995), pp. 118-153.
- \*58 See Donald V. Bittig. *Copyrighting Culture : The Political Economy of Intellectual Prop-  
erty*. (Boulder : Westview, 1996).
- \*59 文化帝国主義については, J. Tomlinson, *Cultural Imperialism*. (Baltimore, MD : John Hop-  
kins University Press, 1991) ; Peter Golding and Phil Harris (eds.) *Beyond Cultural Impe-  
rialism*. (London : Sage, 1997). ; Herber I. Schiller, *Mass Communications and American  
Empire*. (Boston : Beacon Press, 1971).
- \*60 英語帝国主義については, Robert Phillipson, *Linguistic Imperialism*. (Oxford : Oxford Uni-  
versity Press, 1992) ; Alastair Pennycook, *The Cultural Politics of English as an Interna-  
tional Language*. (London : Longman, 1994) ; 大石俊一『英語帝国主義論』近代文芸社, 1997  
年。
- \*61 Susan Strange, *Mad Money*. (Manchester : Manchester University Press, 1998), pp. 23-24.
- \*62 例えば, 一日当たり平均の外国為替市場の取引高は1977年の183億ドルから1995年の1兆2300  
億ドル (デリヴァティブ取引を含めると1兆3000億ドル) へと延び, 世界貿易に対する比率  
は3.5倍からなんと64倍に増えているという。勝悦子『グローバル・キャピタル革命』東洋  
経済新報社, 1998年, 16-17頁。
- \*63 Manuel Castells. *The Power of Identity*. (Oxford : Blackwell, 1997), pp. 5-67.

- \* 64 Manuel Castells, *ibid.*, pp. 72-83 ; N. Harvey. "Rebellion in Chiapas : rural reforms and popular struggle", *Third World Quarterly*, 16(1), (1995), pp. 39-73 ; 落合一泰 (1997) 「< 征服> から < インターネット> へ : サパティスタ蜂起の歴史的背景と現代的意味」『岩波講座文化人類学・第六巻 紛争と運動』岩波書店, 1997年。
- \* 65 <http://clinamen.ff.tku.ac.jp/EZLN/index.html>, <http://www.anet.fr/~aris/zapata.html>, <http://www.dds.nl/~noticias/prensa/zapata/>, <http://www.ecn.org>, <http://www.tmcrow.org/chiapas/chiapas.htm>, <http://www.eco.utexas.edu/faculty/Cleaver/zapsincyber.html>
- \* 66 <http://www.akakurdistan.com/>, <http://www.med-tv.be/med/www/intro.htm>, <http://www.tibet.org/>, <http://www.geocities.com/Tokyo/Towers/7869/>, <http://www.ci.uc.pt/Timor/>
- \* 67 Benjamin Barber. *Jihad vs. McWorld*. (N.Y. : Ballantine Books, 1995).
- \* 68 Samir Amin. *Empire of Chaos*. (N.Y. : Monthly Review Press, 1992) ; Pheng Cheah and Bruce Robbins (eds.) *Cosmopolitics : Thinking and Feeling beyond the Nation*. (Minneapolis : University of Minneapolis Press, 1998), pp. 33-34.
- \* 69 Bernard-Henri Levy, *La Pureté Dansereuse*. (Paris : Editions Bernard Grasset, 1994) (立花英裕訳『危険な純粋さ』紀伊國屋書店, 1996年)。
- \* 70 <http://latena.apc.org/>
- \* 71 [gopher : //gopher.igc.apc.org/11/peace/timor.gopher](http://gopher.igc.apc.org/11/peace/timor.gopher).
- \* 72 <http://www.easttimor.com>.
- \* 73 Alain de Benoit, "Confronting Globalization," *Telos*. Vol. 18 (1995).
- \* 74 Ernest Laclau, *Emancipation(s)*. (London : Verso, 1996). p. 35.

(原稿受理1998年9月28日)